

機縁因縁

中野 薫



よって善人だにこそ往生すれ、
まして悪人は、と仰せ候ひき。
(歎異抄第三章結語)

1、手配

天皇が崩御した後、ある年の暮。

十二月二十八日の正午を過ぎたころ、山原郡白川町巡査派出所に、一一〇番指令が入った。

「白川町立グラウンドの駐車場に二、三日前から不審な白い乗用車が駐車したまま放置。現場臨検調査せよ」

五十五歳の中村巡査は、妻の手作り弁当の菜を頬張ったまま電話に出た。エンジントラブルか何かで、置き放しにしているだけだろうと、軽く考えはしたものの、胸騒ぎがあり、弁当の残りを掻き込み、現場に向かう。

駐車場には、白いトヨタクラウンのセダンが、一台だけ止まっていた。車の窓に黒いシールが貼ってあるのか、車内は見えない。運転席ドアだけが開錠状態で、あとの三枚、助手席側、後部左右はロックが掛かっている。

運転席のドアを開けた。短髪の若い男が、右手をハンドルにかけ、背中はシートに凭れ、頭部はうなだれて死んでいた。

黒いシールが貼付してあると見えたのは、黒い煤で、男の髪の毛が短髪なのは、毛髪が短く燃え残り、パンチパーマ

と見間違えたからだだった。

運転席ドアすぐ下の地面に、ガソリンらしい液体が少量残った、二リットル容量のペットボトルが落ちていた。

中村巡査は本署指令宛、「車両内に年齢二十から三十歳の若い男の死体発見。焼身自殺とも思料される」と携帯無線機で一報を入れる。

その後、後部席のドアを開けると、シートを占拠して大柄の女性が横たわり、これもすでに死んでいる。

中村巡査はやや慌て、「至急、至急、先程の一報は訂正。後部座席に、年齢等不詳の若い女性死体を、もう一休発見」今度は至急無線を入れた。

明らかに殺人事件である。中学生の祖母殺し、I峠での焼殺事件、この二件に続き、中村巡査が警官として関わる、三件目の殺人事件。

中村巡査の一報で、現場に到着した若い刑事は、二個の死体がある焼け焦げた車の中を見て、「これで正月休みも無くなるな」と呟く。

その刑事の現場にそぐわない、軽口とも取れる呟きは、却って、この変死現場の異常な有様を、際立たせる。

中村巡査は二個の死体も、詳しく調べたかったが、それは現場の初動措置と保存が主な役割の、制服派出所警官の分担から外れていて、出来そうもない。

ハンドルとフロントガラスとの間のボード上に、ノートの切れ端の白い紙を見つけた。黒色のボールペンで、「女にさせろと言ったが馬鹿にされたのでやった。俺も行く」と書

かれている。その白い紙切れを、外から見つけ易くするためなのだろう、フロントガラスの黒い煤を、内側から一部拭いていた。中村巡査は、それを先の軽口を呟いた刑事に告げる。安堵したのか、「被疑者死亡、被害者遺体、現場で同時発見、これで本件は一挙解決」不謹慎極まりなく、刑事は、ほくそ笑んだ。

この男は、中村巡査が、現場を派出所員の役割以上に見分するのが目障りらしい。一件落着する要素が揃ったこの事件を、別の観点で捉え直さねばならない仕事は、したくないのだろう。警官としては明らかに先輩の中村巡査を邪魔にし、あしらう態度を隠せない。

暮れも押し詰まった十二月二十八日の御用納めの日。誰もが家族との団欒を優先させたいときでもある。現場の責任者も、また警察本部を筆頭に警察自体も、いちばん休暇に恋い焦がれる時期ではある。

それが理由なのか、現場に県本部検視官も捜査一課の派遣も要請せず、死体を載せたまま車体そのものをユニック車で吊り上げ、荷台にそのまま載せ、本署まで搬送し、そこでより詳細な死体見分をするのだという。

それは、長時間現場保存と見張りに従事させられる、中村巡査を含めた下級の制服警官にとつても、望ましいことではある。しかし死体を二体とも載せたまま、現場から事件を形づくっている対象物そのものを移動する。それが、中村巡査には解せない。

現場主任の山原署強行犯係長が、「外勤（派出所やパト

カーの制服勤務)の人は現場を引き上げて下さい」と任務解除を、慌ただしく指示した。

通常現場最先着し、変死体を発見した派出所員が作成することが慣習化している、「変死体発見報告書」は書かなくていいのかと、中村巡査が尋ねると、

「現場が特異だからこちらで書くのでいいです」
その刑事係長は、はつきりとそう応えた。

遺書と思われる紙切れが見つかり、この事件は被疑者である男が、何らかの理由で女を殺害し、自分も後追いで自殺した無理心中事件である、と判断するのが一般的ではあった。そうなれば、被疑者である男と、被害者である女の身元を特定確認し、男を殺人の容疑で書類送致すれば落着する。

署長を含めた山原警察署の上層幹部は、無理心中による、被疑者被害者ともに死亡の、単純な事件であるとの浅い観測に、傾いてしまった。特別捜査本部も、その段階では設置されず、そのまま収束すると予測したのでろう。

しかし男が自らかぶったとするガソリンの量。男の死体が右腕をハンドルにかけていた点。髪の毛が焼けている程度で、死体は衣服も焼け落ちてもおらず、一見して、ほぼ原形のままである点。遺書と思しき紙切れがまったく焦げてもない点。中村巡査は、心中事件と断定するのは、少し早すぎると思った。しかしそれを強く主張出来る空気が、現場にはなかった。正月前の御用納めの日で、現場臨検者の誰もが、事件を過小評価したがる雰囲気、満々とあつた。

その後年も明け、中村巡査の頭から陰惨な変死現場のことなど消えかかっていた矢先、地元の放送局とカメラマンが、カメラを担いで、白川町巡査派出所を訪れた。

「あの事件の現場は何処ですか」

と尋ねるのである。中村巡査は事件と言われて、すぐには思い出せないほど、忘れかけていた。

「おまわりさんが知らないなんて信じられない」

放送局の者が言う。それでやっと思いつき、

「あの心中事件の現場のことなの」
「おまわりさん心中じゃありませんよ。保険金目的の殺人事件ですよ」

この放送局と同系列の地元のN新聞社の夕刊を差し出した。テレビもワイドショーでさかんに放送していると言う。

中村巡査は赤面する他はなかった。

死体で見つかった向山貞子という女性は、日野真理という女が、形だけ経営する骨董店の、形だけの従業員であり、経営主の日野から、従業員災害死亡時一億の経営者保険を、掛けられていた。この事実を知った警察は直ぐに、日野真理に対する事情聴取をしたが、女は何もしゃべらなかつた。

日野真理は大村人志という男が、そのときから九か月前、自宅を燃やして得た保険金八百万円で、倒産させずにどうにか経営を継続出来た、中古車販売店の従業員である。

大村人志は日野真理に形だけの、いわゆるダミーの骨董

店の経営も、装わせていた。優さ男で見栄えのいい人志は、雇つてすぐに真理と関係を持った。向山貞子に保険を加入させるように真理に仕向けたのも、この大村人志という男である。

大村人志が、自宅に火をつけ全焼させたとき、放火がばれず、簡単に保険金が手に入った。それに味を占めたというべきか、向山貞子に保険を掛け、殺して金を騙し取る計画を、真理に持ち掛けた。

実行に移した日野真理は、あらかじめ、貞子を簡単に金になるからと、テレホンクラブに加入させた。そこで知り合った黒田実男という男と貞子を、白川町におびき寄せ、心中を偽装して、大村人志が二人を殺した。

大村人志は事後、日野真理が警察に呼ばれたことは気づいていた。もし真理が、容疑を告白して帰って来ないなら、一人で逃げる準備をしていたが、真理は、何事もなしに帰つて来たので、二人で行方を晦まそうと決心した。

死亡保険の加入事実。死亡していた男女間に恋情の事実がない。時を失せず、大村と日野が、行く先不明となった。これらの客観的事実は、当然この事件の容疑に繋がる状況証拠として把握される。警察は当初の浅く稚拙な見解は、捨てざるを得ない。心中に偽装し殺害したと判断し、大村と日野の指名手配に踏み切らざるを得なくなる。死体発見から約十か月も経過していた。

容疑者大村人志（四十二歳）と日野真理（二十歳）とが共謀し、女の被害者向山貞子と、男の被害者黒田実男とを無理心中に偽装して両名とも殺害し、向山貞子に掛けていた、災害死亡時一億円の保険金を、詐欺せんとした容疑である。しかし確たる物的証拠は皆無、状況からの類推でしかない。それは白川町巡査派出所の中村巡査が懸念危惧した、初動捜査の混乱不備である。警察の隠された重大な失策であることは、紛れもなかった。

2、殺戮

死体が発見される三日前十二月二十五日の深夜。月はあつたが、雲が厚く垂れ込み、闇は深かった。

殺された向山貞子は、肉づきが良く、女性としては非常に大柄であり、ひきかえ黒田実男は、華奢で小柄な男性であつた。

女性より先に呼び出していた黒田実男は、大村人志が、包丁で首を一突きすると、簡単に気を失い倒れた。

その後、時間をずらしておびき出した向山貞子の頭を、背後からいきなり、金属バットで殴つたが、血が出る割には気絶もせず、大柄の体の頭を抱えて蹲つた。

地面に落ちた血痕を、日野真理はあらかじめ容器に準備していた水で、何度も洗つた。しかし暗闇では、きれいに洗い流されたかどうか、確かめられない。

人志は再び、今度は前面から、バットを頭めがけて打ちおろしたが、女性が左に頭をよけたので、右肩にバットが当

たりバットは撥ねた。この女性はまるで女子プロレスラーであり、人志の力が大の男としては弱いのか、金属バットで打つくらいでは死ぬどころか気絶もしない。

仕方なしに、腰のベルトに差していた包丁で、胸のところを何回か突いたが、女性がそのとき着ていたトレンチコート生地が部厚く、刃先が浅いところで止まり、なかなか奥まで刺さらない。

よろよろと立ち上がった女性に向かい合うと、人志より背が高く、耳の下の頸動脈の付近を下から四十五度の角度で狙って、包丁を突き上げた。その角度ならかなり力が加わり、安物の菜切り包丁だったので、柄が抜けかけた。

それでもう一本準備した果物ナイフで、反対側の首筋を突くと、手ごたえがあつて、血しぶきが跳ねたらしかった。闇の中で、それははつきりとは分からなかった。しかしやつと女性は倒れて横たわった。

女性の呻き声は聴こえるが顔までは見えない。

金属バットは大村人志が家から持って来ていたが、菜切り包丁と果物ナイフは、真理が準備していた。

トヨタクラウンの後ろのドアを開け、グツタリとなった女性を抱きかかえて、シートに横たわらせようとしたが、重くて困った。

反対側のドアの方に回って、血糊の付いた手袋のまま髪の毛を鷲掴みにして手前に体を引き摺り、やっとシートの上に乗せたが、足がまだ少し車の外側に出る形になった。

しかし今度は、体を横向きにさせ、膝を曲げさせるとや

つと、体全体が車の後部座席に収まった。

また息があり、微かな呻き声が聴こえる。

日野真理は万が一、人が来たら直ぐに逃げられるよう、エンジンをかけたまま、少し離れて止めていた三菱ミニカof軽自動車の中で、人志の殺戮行為を見ていた。しかし闇の中、鮮明には見えていない。

現場におびき寄せた、もう一方の黒田実男という男性の方は、女性を始末するより先に、包丁で首を突き刺すと、あつげなく倒れた。地べたに倒れたまま、もう息がない男性を抱え上げて、同じクラウンの運転席に座らせた。

右手がハンドルにかかり、今にも車を発進させる形になったが、人志は気づかなかつた。女性に比べ半分くらいの重さには感じず、作業は断然男性の方が楽に出来た。

二リットルのペットボトルに、小売りさせたガソリンを、半分は男性の頭の上から注ぎ、もう半分を女性のトレンチコートの上に振りまいた。狭い車内なら、この位のガソリンの量で、死体に火が燃え移ると計算していたが、大間違いだつた。

運転席ドアからマッチに火をつけ投げ込んだら、破裂音がしていきなり炎が上がり、人志の顔面の右半分を炎が嘗め、後で気づいたが、両腕に火傷の火袋ができていた。

直ぐに火勢は鎮まり、死体に火は燃え移らず、フロント、リア、左右前後ガラス全部に煤がついて、闇の中、車の外から懐中電灯で照らしても、車内は薄ボンヤリしか見えない。

運転席のドアを開け、ハンドルの上付近のフロントガラスの煤を、手袋で拭いた。殺した黒田に、包丁で脅しながら書かせていた、「女にさせると言ったが馬鹿にされたのでやった俺も行く」という内容の、メモ帳の紙切れを、運転席の前、フロントガラスの外側から見える位置に置いた。

あれだけの火柱が上がった。誰かが見て通報するに違いない。

人志がひとりやるのを、近くのどこかで三菱ミニカに乗ったまま、真理は見ていた。

死体も燃えず、爆発した火勢だけの一瞬で火が治まったのは、大きな計算違い、ミスであった。

凶器に使った金属バットと果物ナイフは手元に残ったが、柄の取れかかった包丁は、闇の中、どうしても見つからない。コンクリートの蓋がかぶせてある側溝の穴から溝に落ちたらしい。

人志はこの計画は頓挫すると思った。日野真理の処分のことか頭を過った。が、それは瞬時に打ち消す。なるべく早い逃亡を、一心に思った。

3、逃走

二人をやつて五日後の夕刊に、大きく記事が載った。

内容は「心中か」という見出しに、クエスチョンマークがついていた。

人志はそれだけで、捜査を打ち切るほど、警察は馬鹿ではないと思った。向山貞子に、日野真理が、保険金を掛けて

いると嗅ぎつける。

案の定、翌々日の朝刊に、日野真理が殺されていた向山貞子に、死亡保険を一億掛けていた事実を、突き止めたと載った。早めに行方を晦まさせねばならない。その為には金だ。

今年の三月に自分の家に火をつけて燃やし、保険金を請求したとき、少しは警察が調べたらしい。しかし八百万の金が割とすんなり下りた。あれは家が燃えただけだから、形だけの捜査で終わらせたのだろう。

今度は人間二人が死んだ。死体を黒焦げにして、打撲や刺し傷の証拠を隠そうとしたが、失敗だった。

この地からの出奔のみを考えた。人志には、東京にいる姉の蓮子のほか、思い浮かびはしない。

所持金は残り少なく、飛行機や新幹線を使うなど、思うべくもない。東京までの一千キロ余り、三菱ミニカの前で軽自動車で行く以外方法はない。しかし、この軽自動車で真理と二人で東京までの距離を走破するのは、勝算の低い博打と同じだ。

日野真理に形だけの骨董店を開かせたとき、犯行場所から遠ざかる東方向への出口の吊り橋に近い七宮に、部屋を借りさせていた。そこにしばらく、真理を隠れさせた。東京で姉の蓮子から金を借りる。直ぐに帰って来るから待つてくれ、そのとき再び、ここ七宮で落ち合おうと約束した。

十二月二十九日、西向き的高速道路は、正月帰省の人たちの車で大渋滞である。しかし東京方面行きの道路は、ガラガラにすいていた。

車に積んできたあの金属バットと果物ナイフは、吊り橋の上から海峡に投げ捨てた。柄の折れた菜切り包丁が気になったが、今やそれは、どうしようもない。

大村人志が三月に家を燃やしたのは、中古車販売の商売を続ける金が欲しかったからである。

人志の親父は、やり手の親父の兄に比べ、能無しの怠け者、根っからの遊び人、その上飲んだくれであった。人志が幼かった頃。仕事はたまに、昔のニコヨン、今でいう日雇い労務者として日銭を稼ぐ程度であった。

普段は競輪、オートレース、軍鶏の喧嘩賭博、花札オイチヨ、賭け麻雀、通称チンチロリンで、その日暮らし。博打に負けると、安物のダルマ焼酎を飲み、母親を殴る蹴るであり、外に出ると、いつときは家に寄りつかない。母親は母親で父親似の人志を、親父への腹いせなのか、追い掛け回して殴りかかった。

しかし不思議と、人志のたったひとりの姉の蓮子には、両親ともに手を出さなかった。そしてこの姉は、いつも人志を庇い、世話を焼いてくれた。

両親は、ほぼ恐怖や憎悪の対象の鬼であったが、自分を常に扶けてくれるこの五つ違いの姉の蓮子は、人志にとって、は、仏か菩薩だった。

蓮子は人志が中学を出るころ、行く先不明になった。しかし、人志宛てには、居所を知らせるハガキがきていた。

親父はそのころ、アル中で寝たきりになった。甲類焼酎

のダルマばかりを飲み続けた祟りだ。そのすぐ後に、今度は母親が交通事故で死んだ。相手は海田の町内の無免許、無車検、無保険の車を運転する女だった。おまけに酒を飲んでいて。保障など、僅かしか無かった。

母親が生きているうちは、アル中の親父も、少しは面倒を見て貰えたが、母親が死ぬと急速に衰え、糞と小便にまみれて死んだ。姉の蓮子を呼んで、坊主に念仏だけ上げて貰い、二人だけで弔った。

親族には、後で父親が死んだのがばれ、親父の兄貴である伯父は、何故知らせなかったかと腹を立てたが、一族の墓の敷地の隅に小さな墓を建て、骨壺にして置いていた母親も一緒に納めてくれた。

親父が残した家は、地元の小ヤマ（小規模炭鉱）の、只同然の払い下げ住宅。二軒長屋の、オンボロ家屋であった。

炭鉱の閉山とともに、どきどきに紛れて、住み着いたらしい。炭鉱は経営者が、夜逃げ同然に逃げ閉山し、登記はうやむやで、早いもの勝ちだった。

両親はもう死んでこの世にいない。たったひとりの姉の居場所を知ってはいたが、己の胸の内だけだ。在籍上はすでに失踪者である。

人志はその点の小才は利いた。約八十坪弱の、その家屋土地を、ひそかに、自分の名義に書き換えていた。

また、そのボロ家に、火災保険を限度額いっぱいに掛けてもいた。

一九九*年三月初旬のまだ寒い朝方、タバコを一箱一本

一本に火をつけ、畳の上にはばらまいた。畳は人志が物心ついた時から替えた記憶がない。表が破れてケバだった箇所が、いっぱいあった。壁や天井の板はどれも古く、カラカラに乾き腐りかけたところもある。

人志は夜明けにその仕掛けをして、家が燃え上がるのを待った。一日中、近くのパチンコ店で遊びながら、家が早く燃えることを願った。しかし昼の間は燻っただけで燃え上がらない。深夜にやっと火勢が上がりが、夜明けに燃え落ちた。消防は通報が遅く、間に合わなかった。あたりに家のある場所ではなく延焼の心配はなかった。

その火災保険で八百万円を得た。これほどうまくいくとは思わなかった。己の運と才覚にかなりの自信を持った。生まれてこの方、感じたことのない力が、内心沸いてきた。

山原郡の海田には、日本の高度成長経済が、絶頂期を迎えるころまで炭鉱があった。すでに江戸末期から明治の初期にかけ、この地方に石炭が発見され採掘が始まっていた。旧財閥系企業は、こぞってこの地方に、石炭採掘の鉱山会社を立地した。海田には財閥系の大規模鉱はなかったが、三十近い小ヤマがあった。

大山人志はそのうちのひとつの炭住街で、少年期を過ごした。最盛期、炭住に居住する者は千人近くもいた。相当の賑わいがあった。しかし、石油へのエネルギー政策の移行で炭鉱の経営が終末期を迎えた。そのころ坑内の出水事故があり、多数が犠牲となった。未だ数十名の遺体が地底で眠って

いる。その小ヤマはその事故がきっかけで閉山。

石炭産業の低迷は、労務管理という、もつとも肝心な炭鉱経営の根幹に、致命的停滞をもたらし、労災事故が増えた。労務災害に対してその都度、保険が支払われた。その額は、当面遊びながら食っていくのに十分な場合もあった。労災保険の支払い額は、利き腕（大抵が右手である）親指の切断事故が一番高額だった。その後、それを見倣い、事故を偽装し災害を騙った保険金詐欺が、海田の隣町を中心にこの地域で横行し、地元の警察が動き、多数の逮捕者まで出た。それを、この海田地区の炭鉱を覚えていた年配の人間で、知らない者はない。

炭鉱が閉山し、働き場所を失くした人びとが、この地域に溢れ、徐々に勤労意欲の低下を蔓延させた。それは今に至るまで、深い根を残している。

大村人志が、自分の家を焼いて保険金を得ようと思っていたのは、子供のころから見聞きした、回りの大人たちの影響である。それは妄想であると、黙殺無視するわけにはいかない、この地域特有の、荒んだ雰囲気を生せる業である。

人志は以前から古物商の許可は持っていた。申請はややこしいと思っていたが簡単だった。素行不良者は取りにくいと言われていた。

人志は、悪事をまったく犯さなかったわけではない。物事への執着欲望が薄かったたので、前科前歴になるまでの犯罪行為は経験していない。というより先見の明があり、小才が

利き、警察に捕まる、へまはしなかった。

三年前に中古自動車の販売店を開いた。

日野真理は、そのとき雇った最初の従業員だった。小柄ではあったが、色白で肉好きもよく、字も書けた。生まれながらに整った顔立ちの人志と真理は、直ぐに肉體關係を持った。

大村人志は女性の扱いに精通していた。幼いときに、姉の蓮子がいつも傍に居てくれて、恐怖や苦痛を和らげるために、抱きよせてくれたからだ。

女というより、女体に違和感がなかった。蓮子は心から慈しんで、自分を抱きしめてくれた。今度は逆に、人志は真理を抱きしめ、愛玩してやった。

真理にとっては初めての男ではない。しかし、同年配の若い男たちとの、戯事めいた付き合いとはまったく違っていた。これほどに上手に触れ、撫でてくれ、扱ってくれる男性は今まで経験しなかった。全身に快さが伝わり、気が遠のきかけさえる。

真理はこの男とは、将来どんな渡り合いがあるかと、別れるのは一筋縄ではないかないし、片時も忘れられない間柄になつてしまつたと感じた。

人志の姉の蓮子は、二十のときに東京に出奔し、巡り巡つて最後は、新宿のバーのホステスになつた。それから立て続けにふた親が死に、人志は中学を出た後、二、三年して、蓮子を頼りに東京に出た。

年齢を三つごまかして、そのころ流行りだしたホストクラブにもぐりこみ、ウェイターで雇われたが、端正な大人びた顔立ちで人志目当ての客も付き、喋りの腕を上げればトックラスのホストになると、その店の経営者は言った。

しかし、田舎訛りの言葉は治らなかつた。元々が、女に猫撫で声で媚を売るなど、人志の性分に合わなかつた。役者の真似事もしてみたが、東京はそれほど容易く生きられる場所ではなかつた。七年いて山原郡海田の生まれ里に帰つた。

中古車の販売は、それほどの儲けにはならなかつた。元炭抗長屋の通りに面した敷地いっばいに、オークションで落した中古車を置いた。主に安物の軽自動車が多かつた。

周りの公営の住宅に住む連中は所得が低い。安い軽自動車があれば、見栄えはボロでも飛びつく。最初はうまくいったが、新規の客はその地域だけでは付かない。だんだん赤字が増えた。

従業員は真理を含めて三人いた。先行きの勘が働き、真理にも古物商の許可を取らせた。近隣でいちばん大きい市の七宮に部屋を借り与え、骨董の商業登記だけをさせていた。

ほかの二人に、保険を掛けてやつてしまおうかと真理に持ち掛けたが、それは余りに目立ちすぎると真理が止めた。

仕方なく、置いていた車は、それでも借金は残つた。を残し、売り払つた。それでも借金は残つた。

それで自宅に火をつけて燃やすことを思いついたのである。これほど簡単に保険金が取れるとは思わなかつた。しか

し五百万近い借金を払って、残りの三百万は、父親譲りの博打好きが祟って遊び続けると、またたく間に消えた。

真理が形だけの骨董店で、形だけで雇っていた向山貞子は、貧しい割には肥えていた。これはいいものを食っているからではなく、腹の足しになり易い、脂肪の多い安い食い物を多量に食っているからである。無駄な脂肪は全身を鎧っていた。これでは男は寄り付かない。

真理は貞子をテレホンクラブに紹介した。これなら声だけで姿は見えない。

何番目かのテレホンセックスの客になった黒田実男という男は、たまたまトヨタクラウンのセダンに乗っていた。

これが計画のディテールに最適だった。大柄の人間が寝そべられる広い車内。

殺害の場所を山原郡白川町に決めたのは、計画が頓挫し、犯行場所から逃れ出るとき、山原の中で、いちばん東方向への出口の吊り橋に近い道路が、直接通じていたからである。

白川町は、赤字再建団体転落間際の町で、ひっそりと静まり返り、人々が己の生活に汲々とし、他人の行いに無関心であるだろうと、人志が考えたからでもある。

山陽、名神、東名の高速道路を、人志は飯も食わずにオンボロの軽自動車で走り抜けた。よくこの軽自動車も買ったものだと思つた。朝方の東京は、車も人もまだ少ない。特に今日はすでに十二月三十日で、会社や役所の大半は休み、通勤客はほとんどいない。

姉の蓮子は、品川の武蔵小山という場所に住んでいた。六畳と三畳の部屋が二つ。場末のバーのホステスならこの程度のアパートのドアを叩けば、人は不審に思う。通路に置かれた洗濯機の上の小窓から、「蓮ちゃん、蓮ちゃん」と二度声を掛けた。小さい時から人志は姉のことをこう呼んでいた。部屋の中で人が動く気配がした。

「まさか人志じゃなからう」独り言ちしたのが、窓の外の人志に聴こえた。自分のことを「蓮ちゃん」と呼ぶのは人志しかない、と蓮子は直ぐに察知した。

ドアを開けると紛れもなく、寢れて目だけぎらつかせた人志が、ドアの外に立っていた。

「どうしたんね」

思わず尋ねはしたものの、蓮子は人志の尋常ではない気配に、十分に気づいた。

十数年を過ぎた後の再会であった。

人志の蒼褪めた顔や吊り上がって異様にぎらつく眼。元々毛虫のような真つ黒い眉毛の右側半分が焼け落ちて無い。右耳に火傷の火袋のようなものがついている。両腕の皮膚が剥け、汁が浮いた様は、尋常ではない出来事があったことを、十二分に物語る。

人志は二人の人間を殺して、オンボロ軽自動車をぶつ飛ばし、この世で一番信頼できる者のもとに、やっと辿り着いた。打拉がれて疲れきり、性も根も尽き果てかけたが、えも言われぬ大きな安心に包まれる。大罪を犯し、地獄の責め苦

に苛まれてゐる筈だった。しかし、蓮子の傍に寄ると、安堵や解れが、一挙に満ちた。子供のころ両親の暴力から人志を守り、抱きしめてくれた遠い感覚が、蘇った。

蓮子は何も訊かなかつた。傷の手当てをしてくれ、飯を炊いて食わせてくれた。

「しばらくはここにおんしゃい。隠れちよつたらしい」

蓮子はそれでも何も訊かない。人志は蓮子の心情を、百パーセント解っていた。

蓮子は大晦日の宵の内まで勤めに出た。勤めの帰りに蕎麦束を買ひ、蓮子がこさえる手作りの年越し蕎麦を二人で食べた。人志はこんな尋常ではない羽目に陥つて、これまでの生涯、はじめてと言つていい、年越し蕎麦であつた。

三日ほどいて、人志は七宮においてきた真理のことが気になつた。

真理が向山貞子に、一億の保険を掛けていた事実はすでにばれている。警察は真理をマークし、その傍に居た人志を共犯者として特定し、探していることも、容易に想像出来る。蓮子は、もう少しじつと、このアパートにいろと勧めるが、真理を放つておくのは、人志の性分が許さなかつた。

一九九*年の一月四日に、今度は逆に東京から西に向けて三菱ミニカを走らせた。去年の暮とは逆に帰省を終え、東京方向への家族連れの車が、人志のミニカが西に近づくと共に増えた。

俺の行く先は、他のあたりまえに生きる人たちとは逆方向ばかりだ、と自分を嘲る。

仕事に精を出し、家族を養ひ団欒や安らぎを得る。あたりまえの人間の日々は、人志のすぐ傍に見えるのだが、中には入らない。

今日も、暮の十二月二十九日もまた、反対の道は混みあつてはいたが、それが団欒や安らぎへのさきがけであることに間違ひはない。しかしそのときの人志に、それに対する憧れなどはなかつた。自分にも掛け値なしの安らぎをもたらしてくれる蓮子。また自分を疑わずに一人の部屋で人志の連絡を待つ真理。

人志は反対車線を走る多くの人たちに、負い目を微塵も持たず、むしろ何故か哀れみさえ感ずることが、自分でも解からなかつた。

真理は七宮のアパートで間違いなく人志を待つていた。

「アネさんもギチギチの生活をしよるき、金は言い出せんかつた。すまん」

「なーんもあんたがうちにあやまることないやろがね」

「うちは女やけん体売つても金は稼げるよ」

「そうまで言うてくれるとか。ありがとよ真理。しょんない、ちよつと危ななばつてん、海田のオジキのここに行つてみよう」

親父の兄であるこの伯父は、人志の親族の中でいちばん羽振りがいい。土建屋だつた。

炭鉱の坑内跡の地盤沈下や建物の傾き、家屋のまるごと移動、工場用地、住宅用地の造成。県営町営住宅建設、公共

事業を主にした請負で、相当の金を稼いだ。あくどいこともした。人志もそのあくどさを、具体的に知っている。地元のも暴力団と深い親交があり、最初杜撰な経営で倒産しかけたとき、その暴力団からの資金援助で立ち直り、倍額にして借金を返し、格段の信用を得た。それからは、自分の息のかかった業者を、町の出入り業者に仕立て上げることが、容易に出来た。

交通事故をわざとおこさせ、角地である自分の土地を道路拡幅の名目で、町に強引に買い上げさせた。また側溝工事の際、自分の家の基礎に故意に罅を入れさせた。この工事は町の発注であり、自宅の高額な補修費を町に負担させ、その工費を下請けからピンハネした。伯父の遣り口に気づかぬ町民はいないと、人志は日頃から思っていた。

人志は真理を連れて、この伯父の家に行った。伯父は不在だったが、その女房がいた。この伯母は夫のあくどさには頬かむりし、遣り繰り上手で頭の回転も速い。

伯母は、人志の髪の毛と眉毛が焼けたあとや両腕のやけどを見つけ、「白川のあの事件はあんたたちね」と訊いた。保険金詐取を目あての殺人事件ではないかと、テレビで盛んに放送していると言う。

人志は金を借りることは諦め、無言で立ち去りかけた。

伯母は「ちよつと待たんね」と人志と真理を引き止める。奥に引つ込みどこかに電話している。伯父に話したのだろうと、人志は気づいていた。

伯母は、「三十万あるきこれ持って行き」と一万円札の

束をふたつにたたんで、人志の手に握らせた。

人志の親族に、身内の者の罪業を、警察に密告するほどの軟な人間は、ひとりもない。人志は血族の有難みをつくづく感じた。

人志と真理は、その金を半分ずつ山分けし、ひとりひとりで逃げ、今度は東京で落ち合おうと、約束した。

「あんたひとりで作った金やきあんたが持つちよき」

真理は、人志がほとんどひとりで動いて作った金なのに、逡巡もためらいもなく、半分ずつにする人志の度量に改めて惚れ直した。

「なん言いいるか、ここまで来たらお前とおれは一心同体、お前がへまやれば、俺も捕まる」

人志が二人を殺している有様を、真理は闇の中のシルエツトとしてしか、見ていなかった。

包丁やナイフを振り回し突き立てたあのと看、阿修羅その者の形相であったであろうその同じ男が、含羞の顔つきで真理を思いやる。

極悪な罪を犯した人間には変りないが、真理にしてみれば、すでに人志は、身も心も差し出して惜しくはない、憧れのスターであった。

4、不手際（二つの殺人事件）

それから約十か月後に、大村人志と日野真理の全国指名手配が公開された。

警察は死体発見直後に、骨董店従業員向山貞子に対する、

災害死亡時一億の企業経営者生命保険加入の事実を、確認した。日野真理に対する型どおりの事情聴取をする。日野真理が易々と真実を言う筈がない。警察は、直接犯行の証明につながる物的証拠を、何ら掴んではいなかったから、強く追及出来なかったのである。

しかし、もしその聴取を受けた人間が真犯人なら、容疑が掛けられていることを察知できない筈がない。その後、日野真理は姿を消し、日野真理のダミーと思われる骨董店を背後で仕掛けていた大村人志も、行く先不明となった。

犯行に使われた証拠となる凶器等は、現場から全く発見されなかったわけではない。

ガソリンを入れていたペットボトルは運転席側ドアのすぐ下、車内からは遺書めいた内容の書かれた紙切れ。発見の日には幾日かずれたが、犯行現場と思われる付近の側溝から見つかった柄の折れた包丁。そして何よりは、男と女の二個の死体。

これらが我心中か、何らかの偽装を施した殺人か、難解ではあつても、事件と捉える前向きな姿勢が、警察の側に満々とあつたなら、死体の傷、特に女性の側の刺された傷の多さは、心中とは捉えにくかった筈である。

また被害者の生命保険加入の有無の確認はしたものの、保険加入の真の動機の追及が出来なかった。この基本捜査を手早く正しくやっていたなら、ごく簡単に、偽装心中を見抜けた筈である。

現場に最初に駆け付けた中村巡査は、仕事上の実績も、

階級昇進の意欲も、それほどはなかった。場末の派出所でウダツの上がらぬ勤務をしていた。それは警察部内で、身丈に合つてはいいた。しかし警官の心意気だけは失つてはいなかった。現場の状況から、紛れもない両者他殺の難事件であると、洞察する感覚は持つていた。ただ警察は、この派出所の勤務員を劣等視するのである。五十を半ば過ぎて階級は巡査のまま、それだけでこの警官の資質は、決定づけられる。中村巡査が、現場措置に異義を言ったところで、いちゃもんをつけるくらいの意味にしか、とらえられなかったらう。

中村巡査は、現行の警察組織に決定的不信を抱く事件にいくつか遭遇し、警官という職業に深く絶望し、早めにリタイアしたいという希望をひそかに抱くほど白けていた。己を空しくしてまで、警察の方針運営に真つ当な意見を言い募る情熱など、ほとんど失せていた。

二年ほど前、中村巡査は、県境の旧産炭地にある〇警察署が管轄する派出所で勤務していた。その担当管内の市営住宅の一室で女性の腐乱死体が見つかった。この女性は家賃を一回も滞納したことはなかった。虫の知らせか、役場の職員がその部屋を訪問すると、郵便受けに郵便物はたまつていたが、表のドアの鍵は開いていた。中に入ると明らかに動物の腐乱臭が充満していた。しかし女性の姿は見当たらない。

通報を受けた〇署は、まず管轄派出所に現場調査を指令。中村巡査が担当した。

水のない乾いた風呂桶の中に、半ば腐乱したこの女性の

変死体を発見。遅れて到着した当直刑事の現場責任者は、盗犯（窃盗罪専任）係長であった。

この人は、警察の業務推進に大きな功績があると認められる者だけに与えられる警察長官賞を授かった、もつとも優良とされる、警官のひとりである。近い将来、警部に特別昇任し、大規模警察署（署長の階級が警視正）の刑事課長に赴任することが決まっていた、組織の中で嘱望されていた。

その優秀警官は何を動転したか、誰が見てもまともな死に方ではない、文字通り変死体を発見しながら、「想定終わり」と真顔で叫んだのである。

この「想定終わり」には如何なる意味があるか。これは警察学校に入校中の実務修習生が、想定された疑似事件現場の検証実習を終了するときに使われる、常套句なのである。

風呂に水がない。下半身のみ剥き出しである。そして何よりも巻き蓋が被せてある。これらがどう見ても、他殺体である印象を強く窺わせる事を、現場臨検した大半の係官は思った。

それをこともあろうに、現場の主席である、この優秀とされる係長は、事故死として捉える見方を、犯行現場で多く披歴した。しかしその意見には、誰も同意はしなかった。強行犯係（殺人担当）の刑事が、その意見を無視し、県警察本部検視官に通報し、より詳細な検証が為され、殺人事件の捜査本部が設置された。

この事件が発覚したとき直ぐ、中村巡査は、この女性の孫である二人の兄弟を思い浮かべた。当時〇市立中学の三年

と二年である。兄弟の父親は覚えい剤使用の常習犯であり、このときも服役中であつた。

地区内に、この父親名義の小さな家があつた。家主は服役中であり、その息子の兄弟と妻は市営住宅に住み、兄弟の祖母、父親の実母である女性（これがこの事件の被害者）もすぐ近くの別の市営住宅に住んでいた。

世帯主の家があるのに、何故分散して住んでいたのか、理由は解からない。しかし偽装離婚して世帯を二つに分け、生活保護費を不正に得るための画策くらい平気で実行する、窮乏地区である。三つに分散した世帯が、同じ市内に故意に分かれて住んだとして、他人は誰も不審とは思わない。

この兄弟はいつも一緒に居た。盗んだ原付バイクを、無免許で乗り回した。学校にはあまり通っていないかつた。監視する役割の大人は母親であつた筈だが、息子たちの背丈が伸びるとともに、手に負えなくなつた。

この事件の被害者である祖母は、母親より厳しかったが、ときには幾許かの小遣いを与えるくらいのことではあつたらうバイクを盗み乗り回すことを覚えて、この兄弟の行動半径は突然広がつた。しかも窃盗の口は、夜間店舗に入つたり、屋間空き巣に入つたりの金品を狙う本格的犯行にエスカレーターした。少年の住居から〇市の中心地へは、小さな峠を越えれば直ぐである。旧産炭地であつてさびれはしたが、街並みは大きい。兄弟は主として、建物に入り込んで犯す、いわゆる侵入窃盗を繰り返した。

兄弟は警察が怖かつた。いつ捕まえられるか気が気では

なかった。それを忘れる為にシンナーを吸った。

ある寒い日、もう一人の仲間を誘って、親父の持家で空き家になっている家に入り込んだ。電気が切られていたのでローソクで灯りを取った。シンナーを吸うと動作が鈍くなる。ペットボトルに入れていたシンナーがこぼれて、ローソクの火が引火した。瞬く間に火は燃えあがり、消防車が来たが、家は全焼した。

兄弟は自宅である市営住宅に戻り、顔に付いた煤を洗い落とすため風呂に入っていると、派出所の警官が来た。「お前らが火をつけたのか」と聞かれた。言いたくなかったので黙っていると、派出所まで連れていかれた。

派出所には人がいっぱい来ていた。○署の刑事たちだったが、兄弟は観念して、シンナーを吸っていてローソクの火に引火して火事を起こしてしまったと白状した。

今度警察から呼び出されれば、少年院送りであることと一緒に警察に呼び出されていた母親が、警察から言われた。兄弟は少年院など行きたくないと思っただろう。

県警察本部捜査一課特捜は、この変死事件を、変質者の強姦殺人という、的外れなまったく誤った捉え方をした。

特捜には、この地区の担当派出所警官の中から選ばされた、元刑事経験のある巡査部長が、充てられていた。この人は、いわくつきの型破りの警官である。K会という今や戦闘的で反警察的であるとされる特定危険指定暴力団を担当する暴力犯刑事の時代、その系列組織の組長の情婦と同衾し、それがばれて刑事を下ろされ、○署に飛ばされ派出所警官にな

っていた。

この巡査部長は、少年院に入所中の被害者の二人の孫を有力な容疑者として具申した。捜査一課は十五歳と十四歳の子供が犯す犯罪ではないと、歯牙にもかけない。

おそらく、特捜の幹部たちは、この巡査部長の経歴を知っていたから、その情報の信頼性を疑ったに違いない。それほどに、当時の警察幹部の洞察力は、浅薄狭量で単純だった。容疑者具申の却下を聞き、中村巡査は驚いた。派出所の警官を愚弄し、劣等視した結果である。この愚鈍な判断が、明瞭簡単なこの事件の捜査を混乱させた。その後、有力情報など上がる筈もない。

少年院などに行きたくない兄弟は、遠いところにトンスラすることは直ぐに思いついた。しかし金がない。母親も金持たない。

「婆ちゃんに借りよう」
兄が言った。

家を燃やしてしまったばかりで祖母が金など貸す筈がないと思えば、ほかに考えつかなかった。夜になって兄弟ふたりで、またシンナーを吸った。もし婆ちゃんが金を貸さなかったときは、どちらかが婆ちゃんを気絶させて、その隙に金を取るうと話し合った。

そしてジャンケンに負けた弟は、婆ちゃんに馬乗りになって顔を数回殴ったが、婆ちゃんは激しく抵抗した。兄が首を絞めると言ったが、根がやさしい弟はそれ以上何も出来な

かった。兄が交代して婆ちゃんに馬乗りになって、また二、三回殴つたら婆ちゃんもグツタリした。そして思い切り首をしめると、婆ちゃんはまったく動かなくなつた。兄は婆ちゃんが誰かに襲われたと見せかけるため、弟に婆ちゃんの下半身を丸裸にさせた。そして風呂場まで婆ちゃんを運んで、水が溜まつていない風呂桶に、婆ちゃんの頭を下にして二つに折り曲げて入れ、巻きあげ式の風呂のふたを広げて被せた。

それから直ぐに兄弟は逃げたが、金もなく空腹で、〇市を徘徊しているところをバトカーの職務質問を受け、窃盗その他の容疑で捕まつた。その後、〇署の少年係が身柄を請け、直ぐに少年院への移送入所が決まつた。

そのときは未だ、兄弟の祖母の遺体は発見されておらず、殺人事件は発覚していなかった。

しかし、弟の方が「爺ちゃんが死んだ」とひとり言を呟くのを、ある捜査員が聞いてかなり不審に思ひはした。しかし、婆ちゃんではなく爺ちゃんと言うのであれば、兄弟の祖父はすでに死んでこの世にはおらず、弟が混乱して戯言を言っているとしたか考えられず、それ以上追及しなかつたのだという。弟は婆ちゃんを爺ちゃんに置き換えて、犯行を仄めかしていたのである。その後兄弟は別々に分かれて、少年院に入所した。

中村巡査など派出所の勤務員は、もう一度強力に特捜本部の上層幹部に、兄弟への強力な取り調べの実施を具申した。兄弟は少年院に居り警察の手の内にある。捜査方針をまつた失くしかけていた特捜本部は、少年院に入所中の弟への事

情聴取を渋々許諾した。取り調べは、あのいわくつきで派出所に飛ばされた元刑事の調査部長が担当した。日頃からこの兄弟とは顔見知りで、その虞犯性について深く把握し、母親や殺された祖母とも見知り合つていたからである。弟は待つていたとばかりに泣きながら詳細に自供し、一挙にこの事件は解決した。

隣のS市内で、県警本部所属の機動捜査隊警部補が、強盗をして捕まつた。不倫相手のフィリピン女性との駆け落ち資金を得るための犯行であつたという。この事件のおかげで、勤務員の不満解消方策（いわゆるガス抜き）が行われ、勤務員の希望する転属地がほぼ希望通りになつた。中村巡査は特に希望してはいなかったが、どういふわけか、生まれ故郷に近い、山原警察署に転勤した。

山原市もまた元の赴任地の〇市と同様に、エネルギー政策の転換のため切り捨てられた、いわゆる旧産炭地と称される地域である。

市の北部に三つの町があり、そのうちの最北部に位置する単独勤務の派出所に配置された。各町に一所一名の警官配置であり、他の二か所の派出所も単独勤務であつた。重要事案に対して、複数の犯人を捕縛する場合、ひとりの警官は半人前の力しかないが、二人になれば四人分の方が発揮出来ると同僚同士でよく言つた。

この地域は、日ごろ表立つて派出所の警官が多忙で、一〇番の処理にかけまわるといふことはない。

犯罪や悪を憎んで警察に頼るといふ風潮は薄く、わが身は己で守るが、そのかわり手段を択ばないという気風があった。

スポーツ精神に則った武道である柔道より、わが身の防御、ときには他者への攻撃の手段ともなる、空手の方が重んじられた。また狩猟目的で許可を得た、散弾銃やライフルなどの銃砲所持者の数も、異常に多かつた。これは多分に護身の意味がある。交通事故の示談は、示談屋が暗躍し、白タク（無許可営業のタクシー）も横行していた。警察などは利すべきがあれば利するが、始めからはあてにしないという気風が、多く認められた。

各種選挙における選挙違反、ことに町長町議の選挙における軽微な違反行為は、警察が厳密に取締を実施すると、選挙として成り立たなくなるおそれさえあつた。選挙民の大多数が咎を負うことになるのは、目に見えているのである。

とにかく、何事においても法令遵守の気風が薄く、警察にとつてはやっかいな地域ではあつたが、何もしなければ、低劣なレベルで秩序が保たれ、一見平穩な街だと錯覚させられた。

ひそかに、この地域を日本のテキサスと言う者があつたが、中村巡査も警官としてそれに同感してはならないと思いつつ、肯わざるを得ず、慢性的無力感にとりつかれた。

昼間はひとりで事案を処理する。夜間は三か所の派出所員が、三つのうちのどこかの派出所に集中して、当務勤務をする。しかし原則は単独勤務であり、夜間もひとりになるこ

とは度々であつた。

隣接の薩田派出所員は伏原という古手の巡査部長、北城派出所は井本巡査長。それと白川派出所員が中村巡査であつた。

伏原巡査部長が担当する、派出所のすぐ裏の町営住宅に、Tという少年が住んでいた。Tは十七歳であり、地元の暴力団S会系の屋手伝いとして曲がりなりにも働いており、本来は実家であるこの薩田町の住居にはいない身の筈である。

天皇が吐血し重篤な状態になり、翌年の正月過ぎに死去した。

この間、国中の祭礼行事は自粛され、仕事を奪われた的屋手伝いのTは、金に困り実家に居ついていたのであろう。

好きな女とも遊べず鬱屈は、最頂点に達していたに違いない。

Tは、薩田派出所前の公衆電話から毎晩深夜、女に電話をかけていた。

日が暮れると、ネオンの光は無論、街灯さえ疎らな、捨て去られたような暗い夜更けの田舎町である。かつて炭坑として栄えたことがあつただけ、暗さと車の通行も少ない静けさが際立つ。コンビニもまだ無かつた。深更の夜、人が出入り出来るところと言えば、派出所くらいしか無かつた。

Tは女に誘いの電話をする度に、派出所に入ってきた。

（ほとんどは断られていた。それはそうだろう、文無しの子ンピラを何処のもの好き女が相手するものか）勤務員である伏原巡査部長は、日ごろから用心深い人で、この旧産炭地特有の荒んだ雰囲気を通大に怖れ、大人しく紳士的ではあつた

が、守りの意識が強く消極的であった。

その伏原巡査部長は、Tへの応対が多分に億劫であったのだろう。Tは来る度に、たばこの火を貸せと言う。未成年ではあるし、伏原巡査部長は火を貸さなかつた。しかし、ほぼ毎当務ごと、Tは派出所に来て火を貸せと言う。

うるさくなつた伏原巡査部長は、あるとき派出所の隅に転がっていた簡易ライターを、貸し与えたのだった。

それから半月もたたぬうち、Tを首領とする少年五名は、女をひっかけるために車を貸せと、たまたま信号停車中の顔見知りの被害者を呼び止めた。被害者が抵抗すると車ごと拉致監禁し、連れまわした挙句に暴行を加え、被害者は瀕死の状態となつた。しかし、まだ息のある被害者にガソリンをかけ火をつけ焼き殺す、という陰惨極まりない犯行を犯すのである。

伏原巡査部長は、自分が煩わしさのあまり貸し与えた簡易ライターが、犯行に使われたのではないかと妄想したとしても、おかしくはない。

将来罪を犯しかねない人間が、自ら派出所に出入りしているのである。警察がその本来の機能役割を正常に果たす機関であり、また末端の勤務員がまったく私心を捨てて、旺盛な職責を持つていけば、と今更に、中村巡査は、痛烈な反省後悔をする。このときのTの、頑なに凝つた心の一部でも氷解させる可能性も、あつたらうにと。

しかし、警察及び警察官は、本来持たなければならぬ理想など、とつくの昔に放棄してしまつていた。

中村巡査と北城派出所の井本巡査長は、この伏原巡査部長の消極性を嫌い、ほとんど同行勤務をしなかつた。

中村巡査も少し偏屈な風変りな巡査であつたが、この井本も型どおりの警官ではなかつた。井本は知能犯の刑事をしたことがあると自慢した。そして感心なことに、宅地建物取引主任の資格を持つていた。この資格を生かせば、相応の対価が入る。ごく近い身内に建設業を営む者がいて、名前と印鑑だけで金になると嘯いていた。

この男は、交通違反などの軽い違反検挙より、窃盗を主とした刑法犯の検挙に、異常に執着していた。中村巡査も犯人を捕まえきれない警官は、ネズミを捕らない猫に等しいという、誰もが疑わない道理を重んじる派出所警官であつた。動機は少し違つてはいたが、その観点で価値観が一致した。

しかし、この井本の破天荒な勤務ぶりには驚かされた。中村が巡回連絡に回つていたとして、そんな勤務は何の足しにもならない、「中村さん。ドロボー捕まえに行きましよう」と中村の出先まで探しあてて誘うのである。中村巡査はその熱心さにはほだされた。

早口で己の都合だけを一方的にしゃべり、自分が言っている意味を相手がつかめなくともそれほど意に介さない、という雰囲気があつた。

これは、千三と称される、不動産屋が商売上で使う口上（いわゆる煙に巻くこと）と、よく似ていた。

また自分は、警官の報酬だけで生計を立ててはいない、宅建の資格を生かして、高い収入を得ることが出来るという

優越感が、取らせる態度だった。

警察は、内部の昇任試験で成り上がる、階級社会でもある。試験を突破して初めて、昇進の榮譽を得ることが出来る。階級試験の考查に落ちて、人から指図を受けなければならぬ屈辱やストレスを晴らすには、上司のあの男より生計に置いては自分が優つていると思ひ込むことも、ひとつの術である。警察という組織は、集団の結集された力によつて、その効力が最大に發揮される。しかし年々給料が上がると、暮らしは楽になる。そしてそれぞれに欲望を持つ。生きがいは、その欲望をどれほど手に入れることが出来るかの、浅墓な心根に向く。

警官という人の役に立つ、善良な市民を邪悪から守り正義を貫く破邪顕正などという理想は、お題目に過ぎなくなる。井本巡查長は中村巡查に、様々にその生計（たつき）の立て方について語つた。

刑法犯検挙への執着も、そのひとつなのである。警察内部で、彼自身の居心地のいい位置を保つための方便に過ぎないのだった。

しかしともあれ、井本巡查長は熱心でありタフであつた。制服の上からジャンパーをひっかけ、私物の軽トラックに二人で乗つて、休憩なしに夜通し容疑者の尾行張り込みを繰り返した。その結果、自動車窃盗グループに加担していた少年に行き着き追及自供させて、主犯格少年を割り出し逮捕した。この張り込み尾行は、上司に勤務変更などの許可は得ておらず（申請しても許可はおりない。制服の派出所警官の勤務形

態からはずれ過ぎている）完全な服務規程違反であつた。

その追求した少年は北城町居住であり、Tに焼き殺された被害者と同じ地区に家があつた。Tの事件が知れ渡つて後、この少年の両親の言うには、

「Tが深夜にうちの倅を何回か誘いに来たが、北城派出所のお巡りから車の窃盗で取り調べられている最中だったので、倅がそれを理由に誘いを断ると、それっきりTは姿を見せなくなつた。お巡りが倅を、殺人犯人から守つてくれた」

怪我の功名で、この自動車窃盗事件の検挙が、少しは世のためになつたかと思ひはした。しかしながら、中村巡查には、深い徒勞感しか残らなかつた。

5、捕縛

大村人志と日野真理は東京近辺を逃げ延びた。

人口の密集と街の大きさは、生まれ故郷の田舎とは比べ物にならない。世を忍び紛れるのは、それほど難儀なことではなかつた。

人志はパチンコ屋の店員として雇われた。武蔵小山に住む蓮子に相談すれば、もう少し実入りのいい水商売の口もあつたかも知れない。二十代の前半二、三年この東京のど真ん中でそういう仕事をした経験もあつた。だがそれは今、無理である。蓮子にも大きな迷惑がかかる。

人志は蓮子にも東京周辺に居ることは言わなかつた。

真理は風俗に直ぐに雇われた。二十歳そこそこの肉体と、

色白の十人並みの容姿が、珍重がられない筈がない。

東京周辺の越河というところに部屋を借りて、二人で暮らした。真理は大浦で働いた。大浦は東京近辺北関東の街の中では、いちばん風俗店が多い。元々男と接することは嫌いではなかった。個室で春を鬻ぐときには、気がいきそうになるときもある。しかし人志を思い出し辛抱した。稼ぎは真理の方が多かった。

しかし真理は、人志を蔑むことなどなかった。人志が真理に、心のどこかで手を合わせていることに、気づいていた。「今に見ちよれよ真理、もう少し楽させちやるき」

人志は口癖のように言う。とは言っても、凶悪な全国指名手配犯として、ポスターがいたるところに貼られ、人志はパチンコ店を、すぐやめた。

ポスターの写真は、真理は今よりずっと若い頃のもので、本人とは誰も気づかない。しかし人志はよく似ていた。元々がはつきりした顔立ちであり、変えようがない。昼間の務めより、夜の方が目立ちにくいのが、飲食店の皿洗いなど性分に合わない。真理は実入りがいいので、人志に働かなくていいと言う。人志はそれに甘えるほどだらけた性質ではない。

男はいつか大きいことをして、女子供を喜ばしてやらねばと、単純明快な心意気を言う。しかしそれはもう無理だと心の裏で、はつきり知ってもいる。

あの極悪非道の大罪の結着は、おそらく生の方向ではなく、死をもって償うしかないのだろうとは、常に肝に銘じていた。

一九九*年十一月、手配からちようど丸二年。大村人志は東京近辺、川添市で捕縛された。

民家に侵入し金を盗んで逃げる際、家人に見つかり刃物を見せて怯ませ逃げようとしたが、通報で駆け付けた警官に逮捕された。誰も傷つけておらず、本来は窃盗だけの罪だが、殺人の全国手配であることがばれて、急遽罪名は強盗に切り替えられた。

刑法二三八条（財物を得てこれを取り返されることを防ぎ、逮捕を免れ、又は罪跡を隠滅するために、暴行又は脅迫をしたときは、強盗として論ずる）いわゆる準（事後）強盗を適用されたのである。

人志はこの犯行に出る前、真理に約束していた。

「旅行の準備をして、北大浦の駅前まで待ちよれ。二日たつても来んときは、お前ひとりで時効まで逃げおせろ」

真理は実際、北大浦の駅付近で二日費やしたが、人志は来なかった。

大村人志は川添の準強盗罪の公判中に、手配中の殺人容疑で逮捕されたが、この件については覚えていないと供述。生まれ故郷の地方検察の調べに、完全黙秘を続けた。

山原署を管轄する県警捜査第一課は、手配を打ってその後、大した捜査をしなかった。あるいは捜査を継続しているという認識が薄かった。

直接証拠は皆無であり、柄の折れた包丁は、犯行に供さ

れたと思われる貴重な物的証拠である筈だったが、警察内部で何処かに紛れ、失くしたという噂さえあった。

翌年三月、拘留期限が切れ、地検は、川添の事後強盗の件で身柄の拘束は続けられるが、白川町の保険金殺人については、処分保留で釈放せざるを得ない。

大村人志は山原警察署に身柄を移された。そしてその後、新証拠が存在したとして、警察は同じ殺人容疑で、大村人志を再び逮捕した。これは容疑者を同一容疑で再度逮捕拘留出来ないという原則に反するとの批判が強し、地裁は拘留請求を却下、検察がその決定に不服を申し立て、裁判所に複数の裁判官の合議審理を求めた準抗告もしたが、棄却された。

しかし大村人志は、川添の事後強盗で刑が確定し、所定の刑務所に服役するべきものを、代用監獄である山原警察署に、服役囚として身柄の拘束が続行された。

大村人志が他県で別件逮捕されて、山原警察署には五年前に設置され、実際には閉鎖されていた白川町の保険金殺人捜査本部が再び開設された。これは所轄の警察署として、あまり前例のないことである。

大村人志と日野真理は二人の男女を心中に見せかけ殺害した殺人の共犯の容疑者として、全国指名手配されていたのである。その主犯格の容疑者の身柄は、既に警察の手の内にある。

中村巡査は間もなく定年退職である。未だに巡査のまま、白川巡査派出所で勤務していた。

五年前の変死現場に最初に臨場した制服警官であったから、白川の偽装心中事件と聞いただけで、事件の概要を思い浮かべることが出来る。しかし山原署の警官は、署長以下上級幹部から末端の勤務員まで、その顔ぶれは、そっくり入れ替わってしまった。おそらく改めて捜査記録に眼を通すなどしなければ、事件の概要すら思い浮かびはしないだろう。その矢先、中村巡査は、特捜班長と称する人からその特捜の部屋に呼び出された。五年前の時点で、現場に最先着した警官が作成している筈の、「変死体発見報告書」が作成されていないと言う。

中村巡査は反論した。

「あのとき、私は現場臨検した刑事係長から、変死体発見報告はこっちで書くからいいと言われました。あの刑事はたしか今は別の警察署に転勤している筈ですから、そっちに尋ねて下さい」

「そんな経緯もあつただろうが、この類の報告署は慣習的、形式的なものだから、その範囲で今、作成してもらいたい」

「今、書くとする、作成日時は今の日付になる訳ですね」
「否、今日の日付では意味がない。発見時の日付で書いていただきたい。変死体の服装状態等の詳細は、資料をやるからそれを参考にしてくれ」

あくまで中村巡査に書かせようとする。

中村巡査はその場は引き下がったが、紛れもなく偽造文書の作成強要である。

大村人志に関する公判維持、未だ逃走中の共犯者の日野

真理の足取り情報の少なさなど、裁判も捜査も混乱困難化していることを、中村巡査は察知した。

中村巡査は、最初の現場臨場時点から、刑事連中の現場におけるやる気を疑っていた。二つの死体を載せたままユニツク車でトヨタクラウンを吊り上げ、山原警察署の署庭に運び、そこで死体見分その他の鑑識活動をするという。

中村巡査は捜査係の経験など、若い頃の選挙や暴力団壊滅特捜応援以外はなかった。捜査係の経験がないから、なおさらそのやり方に、完全なる現場破壊ではないかと、奇異な感じを持った。

そのときの記憶を失念しない為、勤務日誌のコピーと変死者の特徴等のメモを、残してもいた。

それで、あの日の日付の報告書も書けぬわけではなかった。しかし後日、今の日付で、ごく簡単な報告書を故意に作成し、その特捜班長に見せた。「これじゃあ役にたたない」と特捜の長たる男は、その報告書を突き返した。

中村巡査は怯まず、「たとえ形式文書であれ嘘は書けません」と言い返す。すると、「もうよかです」と気弱げに、特捜班長は引き下がった。

6、公判

— 検察や警察の民主化は、重要な戦後施策の課題であった。民主化されたとは言え、杜撰低劣と見なされる捜査手法が時々あつて、有罪あるいは無罪を取り違えることもあつたらう。それが冤罪という問題を生む。人権無視、取り調べの強要、

ときには恫喝的取り調べがある。その戦前の体質を脱し切れない強権力が、事件の解決を偶々、早めたこともあつたに違いない。しかし冤罪はあり、それを皆無にするための法規制が、警察の捜査手法に変化をもたらさず、検察の罪証認定に影響を与える。これが、市民の司法参加を法に定めた、裁判員制度の導入へとも繋がる。それは結果として、黙秘、否認する容疑者を増やす。自白が得にくいなら、「直接証拠、物的証拠」が、より重要となるのは必然である。

刑事裁判制度の改変が、真に冤罪の防止の機能として改善に働くかどうかは、まだ分からない。国民の刑事裁判への積極的参加の意識を高めることは必要である。

それらとは別に重要なことは、司法制度の根幹に身を置く、裁判官の職責の高度な自覚。また人間性を磨き高め、総合的な教養を高める。真実を明晰明敏に見極め追及し得る、広い視野と胆力を持っているかどうか、かかっている。

大村人志は殺人罪で起訴され、一九九〇年五月、人志の在所の地方裁判所で初公判が開かれた。人志は「何も言いたくない」と完全黙秘。日野真理の所在についても何も語らなかつた。

警察は、大村人志と日野真理に関する、周辺の親族知人の犯行を告白したとする調書を五千枚取った。しかしいずれも伝聞のみの内容で、犯行を直接証明する新証拠と呼べるものは、何も示されなかつた。

人志の自白がないため、関係者の供述を積み重ね、証言

の合理性、客観性を固めるほか、公判を維持する手法が見当たらないのである。それも事件に直接関係する内容のものは、ごく一部にしか過ぎない。

翌年その一部の供述である、「被告が犯行を打ち明けた」とする大村人志の親族である者の検事調書を、大村人志の弁護人は、裁判の証拠として採用することに、不同意とした。

その結果、人志の姉の大村蓮子は検察側証人として、東京地裁の非公開審理に、出廷させられた。しかし蓮子は、「言いたくない」と証言を拒否、「弟の無実を信じている」と述べた。

嘩然となった検事、裁判官、法廷は深閑と静まり、裁判長は審理の閉廷を宣告した。実りなかった審理で、検察も裁判官も虚脱感があった。

その直後、微妙な空気が支配した静寂の中で、大村蓮子は、「人志と私はこの世でたった二人の血を分けた姉と弟、口が裂けても人志の不利になることは言わんき」と叫んだ。

それは静まりかえった狭い法廷の壁に反響した。そして、その場に居た、それぞれの役回りの人間の、姑息な思惑を圧倒し、瞬時己の側の矛盾を自覚させ、当惑させた。

大村人志は、蓮子の鬼気迫るこの叫びに、嗚咽した。終には、退出しかけた検事も弁護士も、零れる涙を抑え切れないようだった。

ただ裁判長だけは、平然と冷静に、表情を変えなかった。

大村人志の親族からの状況の伝聞による証言には、人志自身の罪状を裏付けるほどのものは、何もなかった。しかし人志の心を揺すぶったのは、当然であった。自分の仕出かした極悪非道の大罪に、身内の者が、警察や検察に翻弄され続けることは、耐え難い。

人志が犯行直後に、東京で蓮子に会った後、真理と一緒に行った伯母の証言が、具体的に裁判官の心象を動かした。人志が、火傷の傷も頭わに、金を借りに行ったのは事実である。しかしその内容は、テレビや新聞ですでに明かされていた事件を、伯母が疑ったに過ぎない。人志も真理もそれを肯定した訳ではなく、何も言わなかった。それでも伯母は察知して、三十万の金を人志に、文字通り握らせてくれた。

おそらくは、検事がこの伯母に、公判を早く終わらせたい方が、被告に関係する親族のためであるとの因果を含めたに、違いない。それがいいとか悪いとかの問題ではない。公判進展のためのテクニクである。ただ被告人の心の動揺と、それを見る裁判官の心象には、多く影響を与えた。

大村人志は他人に、あの犯行を具体的に、漏らしたりはしなかった。無論殺戮の様は忘れる筈もない。あの被害者の女の呻き声は、一人になるといつでも蘇り聴こえる。人に語り告白したとして、自分が生きてある限り、あるいは生き続けたいという欲望を持ち続ける限り、決して消えはしないと人志は気づいていた。

大村人志はその年の十二月、犯行発覚から丁度九年目、二十数回目の公判で、死刑を求刑された。初公判から二年十か月を経過していた。それからあくる年の三月の公判で、弁護側の被告質問に「起訴状の内容、文面には記憶はない、しかし殺したことは認める」と自白。保険金目当ての偽装心中についても肯定した。しかしながら殺害日時、場所など具体的には、「答えたくない」と再び黙秘した。

その態度口吻は、覚悟を決め淡々として落ち着き払い、元々人志を知る人間なら、物事に動じない、男らしい人間であったと、思い起こさせるに十分であった。

また日野真理との共謀については、「自分以外の人間のことについては何も言いたくない」が、日野真理は生きていくとだけ述べた。

逮捕、釈放、再逮捕。起訴後も一貫して黙秘を続け、弁護側も無罪を主張し続けたが、人志自身の法廷における自白で、急転直下の落着を見た。

大村人志は、あるときの公判で、日野真理の兄にあたる人から、「真理も人志がやつたに違いない」と証言台で陳述されたが、それに対してもまったく無視して黙秘していた。

また年が明けた。その三月初め、大村人志は死刑の判決を受けた。弁護団は控訴を提起。しかし大村人志は上訴権も自ら放棄した。死を持つて償うことを心の底から決心したのである。

三月末死刑確定。事件発生から九年三か月。季節は春

のころ。

それからひと月後、テレビや新聞の報道で人志の死刑確定を知った日野真理は、山原署に出頭。

大村人志は一言も、日野真理の所在を、喋らなかつた。

日野真理との共犯関係など一言も口に漏らさない。

本人が殺人を自白したときも、自分以外のことは関係ない、共犯に関する弁護人の問いかけにも、黙秘した。

日野真理は新聞の報道で、それらを知り、歎息した。語るに余りあつて尽くせない大悪は、大村人志が主導したとは言え、ともになした大罪には変りはない。また殺された二人には、償つても足りぬ懲罰をもつて報いるに、少しも逡巡はなかつた。しかし、それ以上に大村人志の信義の厚さを、真理はだれにも漏らさず、ひそかに心の底に沈めた。

大村人志は無言、黙したまま、共犯者の出頭を決心させた。捜査の効果が及び、追い詰めた訳ではない。共犯者にあつた、大村人志の宗教的とも言うほかはない、無言の説得がもたらした結果であつた。

その年の内、日野真理に対する無期懲役の刑が確定。犯行時二十歳の女は、三十に手が届く年齢になつていた。

大村人志が犯行直後、親族に直接犯行を打ち明けたとする証言が決め手となつて、裁判長は求刑通り、大村人志に対し死刑の判決を下した。

もし大村人志が、それでも尚、黙秘を続け、法廷における自白という大変珍しい行いをしなかつたなら、弁護団は控

訴し、この裁判はまだ、どんな決着を見たか分からない。被告の犯行を決定づける、客観的に直接繋げる、物的証拠は何もないのである。警察が最初の判断で、単純な心中事件として結着させようと慌て、混乱し、ポジティブな捜査体制を組まなかつた。指名手配を打つだけで、捜査が終了したと世間に思わせたかつた。体面を保ちたかつた。まさか他県で大村人志が、別件逮捕されるとは、思つてはいなかつた。

それらが、警察を益々混乱させた。そしてこれほど頑健に、大村人志が黙秘し続けるとも、思つてはいなかつたに違いない。

しかし潔く自白し死刑を受け入れ、上訴権を放棄し、皮肉にも、検察警察の司法手続き、捜査手法の弱点欠点を解消する結末を、与えてくれた。

刑事訴訟法では、死刑又は無期の懲役若しくは禁錮に処する判決に対する上訴権の放棄は、出来ないといふ。本来はこの裁判でも裁判官が、被告の上訴権の放棄を認めなかつたなら、裁判はその後も続いていた筈である。

大村人志が、法廷で初めて犯行の核心のみを自供するという、前代未聞の潔さを示さなかつたら、日野真理は未だ出頭してはいないだろう。

大村人志が死刑判決を未だ受け入れていないなら、九年三か月も逃げ延びたのだから、検挙に繋がる断片情報も無かつた日野真理は、未だ逮捕されていなかつたに違いない。

大村人志という極悪人の人間性が、この事件の解決に、最大最強の糸口を与えた。そしてそれが、検察警察の不手際、

またそれを糊塗しようとする法の拡大解釈など、悪あがきといつていい醜態をも、露出させずに済ませてくれた。

判決を下した裁判長は、大村人志のその潔さに乗り、刑事訴訟法にある、被告による公判廷の自白があつても「補強証拠」がなければ有罪とはされない、とする規定も適用せず済んだ。

被告は明確な黒であるものを、自白もなく補強証拠もない難解な長期に亘つた公判を、結着出来た。裁判長は、大村人志への感謝の念をひそかに抱き、胸をなでおろしたに違いない。

この裁判長は、大村蓮子が人志に対する情愛を叫んだ、東京地裁での非公開審理で、情に流されず涙も見せなかつたこれは、職務に冷静忠実であつたというより、長引いた難解な公判を、どうにかして早急に結着させたいとする事務的合理的な計算しか、心の中にはなかつたと類推させもする。

「裁判官も人の子」という、過酷な責任を負わされる職業に對する世間の同情的フレーズがあるが、この裁判の場合に、特にそれが響きを与える。

法の解釈に関してはあくまでも冷徹公正であらねばならない。しかし裁判官も、個別の人格を持った一人の人間であるという事実は、どうしようもない。

この裁判に、大村人志の犯行と決定させる直接の証拠は、皆無である。それならば、控訴され最高の裁判まで結着を先延ばす方が、人間の人間らしい社会にとつては、理想の裁判であつたのではないか。

それも被告自らが、上訴権を放棄してしまつたからには、どうすることも出来ない現実があるのみだつたのだから。

7、刑の執行（機縁因縁）

人は何らかの、必然的機縁がないと、人を殺したりはしない。人を殺さざるを得ない因縁が、その人間を動かす。

この世に殺人は尽きない。人間が人間としての営み、植物を採取し動物を狩猟し、また飼育し屠殺して生を繋いできてこの方、殺人は絶えたことがない。

殺人はいかなる時代でも大罪であつた。しかしすべての人間が人を殺すわけではない。機縁因縁がそうさせるのである。

人を殺すほどの因縁の中に在る者は、またその人を殺す方法が、悪辣残虐ならばそれだけ、何かにすがり救われたいという心底の欲求が、激しく湧くのではないか。

大村人志にとつては、殺人犯行の事実は告白しても、具體的な、何時、何処で、如何にして、何を使って、相手の体のどの部位を、どうやって傷つけ痛めつけ、相手の絶命はどのときであつたかなど、死ぬまで語らなかつたのは、言葉では表現不可能な、消去出来ない、忘れ得ない、呵責後悔の念に満ちた、極めて鮮明な画像だつたからだろう。

人を二人も殺し、女の呻き声を、自分の残忍な手法によつて傍らに斃し、耳にしたときから、捕縛され処刑場にぶら下げられるまでの日々。

一九九*年から二〇〇*年までの十七年間。

断末魔の声を、一刻一瞬たりとも、忘れはしなかつた。あの声が聴こえなくなる日を待望し、すべての煩惱を落し、あの世へやつと行けると安心し、従容と処刑場への暗く細い路を歩いた。

大村人志は人を殺し、呵責後悔に悶え苦しんで、真に人間を回復し、他のあらゆる死者と同じ死を手に入れ、仏性を帯びた。

大村人志は心底罪を償い、改悛し、順々と刑に服したと信じるに難くはない。

大村人志 二〇〇*年四月末日死刑執行没
享年五十九歳 南無阿弥陀仏

了

※この小説は、現実起きた事件の時間経過を基にした、作り物である。
※事件を報じた西日本新聞の記事に拠るところが多かつた。